

企業ニーズの吸い上げと成果の普及を積極的に

松 本 章

林産試験場では、昭和 59年度から林産技術交流プラザを実施しています。また、平成 4年度からは成果普及講習会を開催するなど、あらゆる機会をとらえて、開発製品や技術の成果普及のため、関係企業の方々と接触を図るよう、日常的に努めています。

林産技術交流プラザは、スタートしてから既に10年が経ち、内容の充実が求められており、今年度からは研究ニーズ吸い上げのため、各地域の企業経営者と懇談をする場を設けました。また、北海道内各市町村の建築、土木施設、公園施設等の担当者に、林産試験場の開発製品をより積極的に普及するため、新たに開発製品実用化推進事業に取り組むこととなりました。

以下、その概要について紹介いたします。

林産技術交流プラザ

この事業の前身として、かつて「一日林産試験場」や「移動林産試験場」がありました。企業等の要望を取り入れ、その都度内容を充実させながら取り組み、今日に至っています。

今回、胆振・日高支庁管内の林産技術交流プラザを実施するに当たって（8月23日実施）、木材産業界の林産試験場に対する要望をくみ取り、研



林産技術交流プラザ（業界との懇談会）

林産誌だより 1995年11月号

究テーマの設定に反映させることを目的として、経営者の生の声を聞きました。当日は、製材、集成材、木材流通、住宅設計・建築、防腐、パーティクルボード、合板等の各分野から、11名の方々が出席されました。

懇談会に先立ち、企画指導部長より林産試験場の技術支援制度の概要説明、林務部林産振興課鈴木課長補佐から、同課の7年度事業の概要説明があり、話しの糸口を切りました。企業経営者の発言の要旨は次のとおりです。

- (1) 今後、トドマツ間伐材の供給が増えるので、この利用についての対応が急務である。
- (2) 集成材の製造において、工程の簡略化と歩留まりの向上を図る必要がある（現状では、丸太からの最終製品までの歩留まりは約33%である。プレーナーに通す回数が多すぎる）。
- (3) 通常、造作材は乾燥しているが、構造材を乾燥している例は少ない。乾燥材の流通を促進するためにも、公共事業における乾燥材の指定を進めて欲しい。
- (4) 製材工場で増加している副材を用いて、効率的に集成材（構造用）等の付加価値の高い製品を製造するためのシステム化を進める必要がある。
- (5) 円高により安価な製品輸入が増大している。しかも、国内の製品価格は輸入品主導で決まっており、対応に苦慮している。
- (6) 丸太の小径化が進み、製材歩留まりが72~3%から64~5%まで低下している。現状では、技術者はいるが、後継者がいなくて困っている。
- (7) 死節が欠けない乾燥方法があれば教えて欲しい。
- (8) PL法の関係で、ホルマリン臭がなく、仮接着力が良くて最終接着力の高い接着剤を、メーカーとともに検討中である。

(9) CCAに代わる新しい低毒性防腐剤の開発が急務である。

以上の発言の中には、現在取り組み中の課題もありますが、対応可能なものについては、早急に取り組みたいと思います。

今年 8月には、道内61社の木材関連企業を対象に、明年度以降の研究課題設定のための要望調査を行いました。さらに、9月には異業種企業も含めて 9名の方々と、研究テーマの吸い上げを目的として、座談会を持ちました。林産試験場では例年10月には、明年度の研究計画について、検討会を行っています。企業の方との日常的な接触をさらに深め、企業のニーズを十分くみ取ったテーマを設定するとともに、速やかに結論を出してお応えしていきたいと思っております。このような改まった場にとらわれることなく、取り組んで欲しい研究課題がございましたら、林産試験場にどしどしお申しつけください。

開発製品実用化推進事業

林産試験場と企業との共同研究等で、多くの成果が得られています。また、独自に開発した成果もあり、企業に技術移転されているものもあります。そこで、今年度から道内各市町村あるいは開発局の建築設計、土木施設、公園施設等の担当者に直接会って、林産試験場で開発されたさまざまな製品や技術を紹介し、木材がより一層使われやすい環境作りを推進するため、「開発製品実用化推進事業」に取り組むことになりました。なお、この事業では、市町村の設計担当者との話し合いの中から、木材使用に当たった問題点を洗い出し、研究テーマ設定にフィードバックさせようという希望もあります。

今年 8月末の胆振支庁管内（5市町）を皮切りに、9月から10月にかけては上川支庁管内（14市町）、10月末は日高支庁管内（9町）、さらに11月中旬には十勝支庁管内（6市町）の各市町村を訪れました。200を超える全道の市町村をくまなく回ることは不可能ですが、できるだけ多くの市町村を訪れたいと思っています。3年計画で全道

を一回りする予定です。

市町村の森林資源背景が異なることもあって、木材・木製品の利用に対する取り組み状況も、実にさまざまです。森林資源の多いところは、森林組合のような団体もあり、両者が協力しあって、積極的に木材の利用・製品開発に取り組んでいる例も見受けられます。11月20日現在、34の市町村を訪れて担当者にいろいろ説明しましたが、担当者の木材に対する考え方等を整理すると、おおよそ次のようになります。

- (1) 木材の使用に当たっては、当然メンテナンスが前提となるが（メンテナンスが面倒という意見もあったが、鋼製等の他材料でも、程度の差こそあれメンテナンスは必要である）、補助事業等で各種施設を建設しても、設計・建設の費用しか見込まれず、数年後に必ず必要となるメンテナンスの費用は市町村の負担となる。
- (2) 円高によるコストの問題から、道産材ではなく輸入材を使う傾向がある。
- (3) カラマツに対する使いにくいというイメージ・先入観が、相変わらず残っている。
- (4) 木材はコストが高い（材料単価の見直しが必要）。しかし、一方で木の温もりは何物にも代えがたいという考え方も定着しつつある。

(1)のメンテナンスの費用や(4)の材料単価の問題は、研究機関では取り組みにくい課題です。また、コストは確かに木材を使用する上で大きな課題です。しかし、高いからといって鋼やコンクリートやプラスチックのような素材のみに頼っているのでしょうか。これらの材料は、製造する過程で大きなエネルギーを必要とし、さらに不必要になったときの処理にも大きな問題を抱えています。木材を利用することで森林が活性化され、地球環境の保護が図られます（本誌 5月号「地球を守る森林の働き」参照）。私たちは、木材こそが環境に優しい「エコマテリアル」であるという考えに基づき、もっと木材を使っていただくようにPRしています。

（林産試験場 主任研究員）